

# タウンミーティング2021第1回【農業】意見交換要旨

## ● 日 時

令和3年7月16日（金） 10:00～11:30

## ● 会 場

姫路市役所 会議室

## ● 参加者

清元 秀泰 姫路市長

若手農業者 5名

学生 2名

## ● 意見交換の主な内容

（発言者1）

【意見】 病院に入院した際に、健康って大事だと改めて考え、農業でもやってみようかという考えで農業に携わり、兵庫県が神戸の西区で行っている楽農学校というところで学んだ。以前から、田植え（酒米作り）から始めて、美味しい日本酒を作って参加者に飲んでもらう播磨日本酒プロジェクトというイベントを実施しているが、コロナ禍で集まれなくなったため、昨年からは、リモート酒作りと称して、バケツに稲を植えて参加者に持って帰ってもらい、SNSで肥料を入れるタイミング、水を入れるタイミングなどを指導して、最後に粃を集めて、その酒米から作った日本酒を参加者に買ってもらう取組を行っている。昨年は60名の参加であったが、大好評で今年は県内で300名の方が参加してくださっている。

やはり、ある程度の品質以上の味や価格の競争の中で選ばれる基準は、結局人だと思う。参加者が自分事になってくれると、思いがこもったお酒は、その人にとって世の中のお酒と全然違う領域にあり、本当の意味で顔が見える農業って言うのをやっていかないといけないと思う。

栽培者という形で、どれだけ自分事にするかというところで、今度は皆さんの家で食べるお米をベランダで育ててみませんかという横の展開で、コメ作りをしていきたいと思う。

【市長】 自分のベランダで、二酸化炭素を吸収してカーボンニュートラルでエコ活動の一環という運動にするのはなかなか面白いと思う。また、私も自分でお米を作ると、毎日のご飯が美味しいと思う。

（発言者2）

【意見】 農業大学校で1年間研修を受けて3年間何とかやってこれた。若い人にも農業にぜひ興味を持ってもらい、就農する若者が増えてくれることを願っている。

野菜嫌いの子でも、おいしいと食べてもらえる野菜作りを目指してやってきた。子どもにとっても安心安全だし、おいしい野菜を作ろうと品質にこだわって作っている。

買い物に来るのは女の人が、子どもの食の事を考えるのもお母さんが多い。女子目線で考えながら作物を作れるのは女性農家の特権である。農家になり初めて知ったが、兵庫県の農業基

準は高く、自分の子どもに食べさせたくないものを作りたくないの、私は花がついてからは化学農薬を一切使わない。食に対する意識が高いお客さんが多いと思うので、そういう付加価値をつけて高価に販売することもできるように思う。

【市長】 生産者が手塩にかけたことに対してのフェアトレードの精神を、しっかりと消費者側にも伝えていく必要がある。

(発言者 3)

【意見】 たまたま自然農法という、一切農薬肥料を使わず、種も自家採取するような米作りをしている人の話を聞き、農業を始めた。その時は、まさか農家になろうとは思っていなかったが、農薬肥料を使わずに作ったお米がとっても美味しくて、これはちょっとすごいなと思い、そこから真剣に就農して今年で16年目になる。農薬を使わない農法は、日本全国の中でも本当にわずかだが、そういう志を持って日々頑張っている。

食育の一環で、種まきから収穫までの中で、自分が農家としてまいた種の発芽の瞬間を見てもらいたいというのがあり、「これが種になるんだよ」と家に持ち帰ってもらい、5粒ほど水につけ、農家でしている作業を一通り家でやってもらう。土と種を渡して自宅で苗を育てて、田植えに持ってきてもらっている。

農業の秘訣は、よく観察することと、摘期を逃さないことが1番である。

【市長】 炭素や窒素を固定していけるということで、これから大豆は、環境植物として、大きく注目を集めるのではないかとされている。米、もち麦、大麦以外にも大豆も作られていることだが、大豆の環境政策とか独自化について何かアイデアがあったら教えてもらいたい。

【意見】 先程、摘期の話をしたが、近年豪雨が増えており、種をまいても腐ってしまい、なかなか芽が出てこない。機械で種をまくが、発芽すると上の土が蓋をしてしまっていて押し上げてこない。大豆、国産大豆の価値というものを伝えたい。

(発言者 4)

【意見】 もともとロボットの研究者で、二速歩行のロボットを研究していた。また、地域活性にも興味があり、地域活性×ロボットを考える中で、農業は作物を作る、さらに地域の雇用、地元で販売していく、ということができ、地域で人のお金が回り、すごくよいビジネスだと思った。単にIT化すればいいだけではなく、地元で売っていくために、地元のお客さんに応援してもらうために、どうしていくのかをしっかりと考えていかなければいけないと思うが、多くの方に知ってもらうためには、個人でできることは少ないと思うので、他の農業者の皆さんとも今後色々な形で付き合っていきたいと思っている。

私は企業参入という形で行っている。担い手がどんどん減っていく中で、企業が今後入っていかないといけないと思っている。その中で素人でもできるようにするためには、熟練の農業者のすごい技術をできるだけ数値化し、ITのセンサー等を使って経験等を、どこまで数値に落とし込めるのかがカギになる。また、姫路は都市近郊型の農業ができるエリアなので、ITを使用し、小さい面積で、収穫量と販売単価を上げた高効率生産を行い、中間リスクを省いて手取り単価を高くする取組を行っている。

【市長】 農業でコミュニティを元気にしていこうという熱い思いがすごく伝わってきた。モデルがないとやはり皆さん導入しにくいと思う。それこそ農耕の牛から耕運機や田植機に変わっていく時にも、多少抵抗があった。スマート農業にまだ壁があると思うが、どういう方向性でどう

いう技術力を研究していったらよいか。

【意見】 農業のITの先進国であるオランダでは、トマトを作る方法は2、3種類程度しかなく標準化されている。日本のトマトの作り方は何百通り何千通り、いちごも何百通り何千通りある。どの作り方に合わせて技術開発していけばよいのかがすごく難しい。僕は日本の国産の技術で、オールジャパンで、日本の農業を輸出産業化していきたい。海外まで見れば比較的マーケットがあるところもある。この日本の技術を発展させるために、まずは日本人の顧客を育成していくところからスタートして行かないといけない。

【市長】 世界中が脱炭素を目指す今、農林水産省が、使っていない田に、太陽光パネルで再生可能エネルギーを使ったものを取り入れても構わないと方針転換した。耕作放棄地とエネルギー問題を炭素補填で一体にするようなSDGs的なエネルギー政策をできないかと考えているが、スマート農業の中でよい方法はあるか。

【意見】 農林水産省と経済産業省が少しずつ近寄っていつているのかなというのは感じる。一方で仕組みはそうなっているけど、芯のところが入ってない。農業は色んな技術を使えば、やり方をそのまま維持しつつ新しいやり方で皆がハッピーになるようなやり方もあると思う。規制をどんどんと除いていく一方で、行わなければいけないところもきっちりしないといけない。景観もあるだろうし、保水のこと色々あるだろうから、その辺も一緒に考えさせてもらいたい。

(発言者5)

【意見】 大学で地域の課題を美しく解決するという地域デザインを学ぶ中で、いつか自分の農業で故郷に戻って地域デザインをしたいという思いがあった。紆余曲折のなか、イタリアのオリーブ農家の方に刺激を非常に受けた。すごく格好よく農業がステータスのように生きられており、日本の農業のイメージと非常に違い、誇りを持って農業をされていると思った。

6次産業化に取り組んでいる中で、様々な繋がりができた。様々なデザインを行う中で、多くの地域の方と交流し、姫路のPRもしつつ、色々なファンも広がる中でまだまだこれからも多種多様に繋がっていったらと思っている。6次産業化の難しさは、自分が何屋か分からなくなることだ。1日の中でも色々な業種が入っており、農家もあれば飲食業、販売業もある中で、自分の中でいろいろ切替えができるかどうかというのが非常に大きい。ただ、姫路だけでなく全国の方と繋がれるようになったのも6次産業化のおかげだ。

6次産業化は一人では出来ないと今しみじみ感じている。農家や漁師が集まって、色々交流していこうと活動している。それぞれの得意分野を上手に引き立てていきながらブランドに繋げていくというのも非常に大きい。

山形の鶴岡市は、食のユネスコ創造都市である。絶対姫路も食のユネスコ取れるなっていうのをすごく感じた。鶴岡でユネスコをとったシェフの話を知ると、海も里山もある姫路は絶対取れると。生産者も前面に出られるし、全部を繋いでくれる世界遺産があって食まで世界が認めるっていうのは他の地域ではないと思う。

姫路市に道の駅の構想があると聞いたが、イタリアにはイタリーという1つの建物の中に海のものを食べられるレストランと物販、野菜が食べられて、野菜が売っていて後ろにマーケットや加工品があるという1つのテーマパークみたいなものがある。そういうのが姫路にあって、そこでネットワークができて、そこに食のユネスコというような、文化の地だとお墨付きがあれば、姫路播磨圏っていうのは日本でも有数の食の街になる。

【市長】 よい提案をいただいた。地域だけで、海のものも山のものもしっかりと循環できて、資源のネットワーク化、連携を、我々行政がプラットフォームとして提言していかないといけない。単なる直売所ではなく、そこに行くと食文化を実感し楽しめるというようなことも必要だ。

(発言者 6)

【意見】 学校でファームボットという機械を使って農業を行っている。ファームボットとはパソコンやスマートフォンから手軽に操作することができる農業用ロボットであり、日本にも数台しかないと聞いている。このファームボットが学校に来たのは2021年1月。STEAM教育の一環で学校に贈呈され、現在は学校の中庭に設置されている。STEAM教育とは、サイエンス（科学）、テクノロジー（技術）、エンジニアリング（工学）、アート（美術）、マスマティクス（数学）という様々な分野を合わせた学習の取組のことである。これまで農業をしたことはなかったが、このファームボットの導入がきっかけで、農業やロボットに興味を持つようになった。後輩もでき、僕も負けていられないと頑張っている。

(発言者 7)

【意見】 大学の研究室でカモミール摘み取りロボットの作成を担当している。カモミールの摘み取り作業と、その後の選別作業が大変なため、上から写真を撮り、写真からカモミールの状態を検知して質の良いものをピックアップして摘み取っていくAIロボットの研究をしている。農業というより、ロボットでどうやって農業を支えていけるのかというヒントを貰いたいと思っている。

【市長】 農業は高齢化が進んでおり、汗水を流して年配の方だけがやっているという農業になってしまわないためにも、障害をお持ちの方や、例えば事故に遭われた方でも、ロボットやAIを活用して協力し合いながら生産性を高めていくようになっていければよいと思う。